

ほない歴史通信

第62号
2012.3.1

大子混声合唱団の遺産を活かす

今年度も、大子町教育委員会生涯学習課が主催する「ふるさと歴史講座」が開講され、多くの町民の皆さんのが参加された。その最終回に当たる第五回目は一月二一日に行われ、「先人たちのまちづくりから学ぶ」と題して私が担当した。当日は生憎の小雪模様の天候であったが、それでも五十名ほどの方が参加され、最後まで熱心にお聞きいただいた。感謝である。

話しの素材の一つは昭和二〇年代の依上村。「人情村長」といわれて村民の信頼を集めた塚田金重村長のもとで進められたむらづくりの様子を紹介した。とくに、三〇代、四〇代の働き盛りの村民を集め、徹底した実情調査に基づいて農村計画を策定し、その計画実現に努めた考え方と手法は、今日のまちづくりにも通じる大きな意味をもつ実践であったことを強調した。もう一つの素材が昭和三〇年代に活躍した大子混声合唱団。これについては「歌声ひびく明るい町を目指して—大子混声合唱団の足跡—」とのタイトルで、本誌に九回にわたって連載したことがある。講座では、合唱団の誕生から解散までの経緯、合唱の楽しさを多くの町民とともに共有しようとして企画、実行された一〇回に及ぶ「秋の音楽祭」、広く一般から歌詞を募集

し、それに曲をつけて発表するという当時としては極めてユニークな取り組みである「よい歌を育てる運動」、その学生の部入選作「十五夜峠」（常陸太田市の音楽家川俣雄司氏作曲）と一般的部入選作「雨だれさん」（大子町の音楽家川俣雄司氏作曲）等についてお話しし、これら一連の多彩な活動はまさに音楽のまちづくりであり、とくに「よい歌を育てる運動」は地方からの文化発信に挑戦した果敢な試みとして評価できることを指摘した。

ひるがえって今日、文化芸術活動がまちづくりとの関係で大変な注目を浴びている。例えは、次のような指摘がある。「文化芸術は、それ自体に価値があり国民の豊かな暮らしのために必要不可欠のものであると同時に、社会を活性化し国や地域の魅力を高める力を有している。／このような文化の持つ力は、文化と比較的近い位置づけにある教育や文化産業などの領域にとどまらず、産業振興、観光、商業集積活性化、福祉など、まちづくりのあらゆる面に及ぶ。特に、経済活動については、文化が新たな需要を創出したり、地域産業での高い付加価値を生み出す源泉となったりするなど、密接な関係にあることも注目されている」（文化力を活用した都市に関する調査研究報告書）、と。今や、全国各地で、様々なジャンルの音楽や現代美術を活かしたまちづくりが展開されている所以であろう。

先日、私の話をお聞きになつた参加者のお一人が、「十五夜峠」「雨だれさん」をピアノで弾き録音したCDを送つてくださった。眠っていた譜面が、約五〇年の時を経て音に再現されたわけである。音楽に門外漢の私も、素朴ながらも癒される曲調に引き込まれるとともに、大子町を舞台にした先人たちの先駆的な取り組みに思いを馳せた。とくに、川俣氏は大子町の作曲家である。貴重な文化資源でもある川俣作品に光を当てる手立てはないものだろうか、そんな思いにも駆られていた。

（齋藤）

猛省すべし閑鉄之助

桜岡滋弥

水戸藩九代藩主徳川斉昭が実施した殖産業のひとつに栗塗がある。

現在の茨城県桂村栗で生産された盆や膳に、秋田産の春慶塗(わちぬり)をまねて、漆液に杉脂を混合して塗装した製品である。ところがこの栗塗、さっぱり売れないので当地の稻川家が栗塗の技法を伝承し、無形文化財保持者という。さて、この漆液であるが、これは周知の如く漆という樹木から採取する。

水戸藩では藩主の命令であるとして領内の人民に漆栽培を奨励し、下級武士たちもあらそつて地所を借りるなどして栽培に及んだ。

藩の学者藤田東湖の妻里子（水戸藩士山口徳正の長女、桜田烈士の一人山口辰之介の姉）は金子孫二郎（水戸藩主、桜田門外の変の主謀者の一人）に書状をよせた。曰く、夫はまつりごとで蟄居、それでなくとも大酒飲み、長男、次男、三人の娘と妾の子、姑までめんどうをみるとことになつた。生活は火の車、きくところによれば漆栽培が金になるというが、どこか土地を探して植えてほしい云々。

金子はこの頃領内四奉行所中西奉行所の頭取だったので、その手配はしたと思われるが、その文献は残されていない。

次に、同じく桜田門外の変では陰の主謀者である高橋多一郎は、事変後、長男とともに京に向けて出発するにあたり、家族であて遺言をしたためた。（妻は茅根氏。次男、二人の娘とそれぞれぞの婿）

遺言の内容は、自分が勤務していた北奉行所管内大沢村（現

在は大子町大沢）の庄屋大高富衛門に、漆苗五百本を植えさせた。生育を待つて生活費にしてほしい。

同じく、郷士で頃藤村（現在の大子町上小川）の庄屋桜岡源次衛門には、五百本が望ましいが三百本、いや二百本でもいいから、と漆苗栽培を遠慮がちに依頼している。

天皇侍従(しゆんせいぬり)も、姉が離婚し（水戸藩士大内菊太郎の妻）生活に困つたので漆栽培を……と、枚挙にいとまがない。

ここで彼らに共通していえることは、漆の木から樹液を採取するまで、十年からの年月が必要であることをまったく知らない。郡奉行にいて巡村して農作物の収穫を見るのが仕事の高橋ですらこの有様である。

この辺で、タイトルの閑鉄之助の出番となる。

彼は安政のはじめから文久二年（一八六二）に国事犯として死刑するまでの約九年間、もっぱら管轄の北郡奉行所内の村々で郷士、庄屋、商人などから攘夷のための軍資金と称して金品の援助を受けるだけで、それを恥ともしない。漆苗だと？そんなの知るか。

そればかりか、和久村（現在の常陸太田市和久）では強制的に金を出させているのだ。彼の残した日記にあきらかなように治療代、第三の女といわれる大田村庄屋立川治衛門の息女阿玉の給金まで桜岡家から都合してもらっている。

前述の金子にしろ高橋にしろ、攘夷という大義名分では公として蒟蒻会所の売上金を利用したが、私的には漆苗栽培で生活を考えたのである。

閑は殘念ながら公私の区別なく金を使い果たした。

「猛省すべし、閑鉄之助」とのタイトルは、もって宜なるかな、と思う次第である。

句碑「川上と この川下と 月の友」を訪ねて

益富幸子

町外れの久慈川がもう目の前というところに金町観音堂がある。この一帯は、江戸時代豪商が軒を連ね、久慈川の水運で栄えた中心部だった。大子町の郷土益子氏一族の墓所でもある。その観音堂に「月川塚 川上とこの川下と月の友 ばせう」、すぐ横に「花咲や達者も老いのひとかせぎ 魚淵」と彫られた芭蕉の句碑がある。

芭蕉が埋葬された大津の義仲寺で発行した『諸国翁墳記』天保十四年（一八四三）度版に、文政七年（一八二四）ごろ魚淵という人が建立したと載っている古い句碑だ。

魚淵は、小林一茶の友人に近い弟子で、信州「長沼の十哲」の一人佐藤魚淵をさす。漢方医で、法橋という医者の高い位を持つ。文化九年（一八一二）地元の日吉神社に芭蕉の句碑を建立、その記念として『木槿集』を刊行。天保五年（一八三四）没、享年八十歳。

謎のはじまりは、「信濃の國の人魚淵が、なぜ常陸の國大子に句碑をたてたのか」から。

一茶記念館に謎をとくためのヒントをお願いしたら、魚淵が常陸の国大子に句碑を建立した事実は残っていない、同姓同名の別人ではないかという意見であつた。

芭蕉の生誕の地「伊賀上野」にある芭蕉記念館に尋ねると、『諸国翁墳記』には、句碑を建立したのは魚淵としか載っていないこと、魚淵は、句碑の彫つてある年齢から見ると、小林一茶の弟子佐藤魚淵であろうということであつた。

県立歴史館には『諸国翁墳記』があるので見せていただいた。一七六一年発行のもので、大子の月川塚は載っていない。結局魚淵が誰か特定できる資料が現時点では見つからないので、二つの方向から考へてみることにした。

一つ目は、魚淵が一般的に言われている魚淵とは別の場合である。大子には、俳額が残っていて俳諧をたしなむ人もたくさんいたことがわかつていて。益子氏一族の俳諧好きな誰かが、久慈川の情景に合うこの句を刻んだのではないか。
二つ目は、信濃の人佐藤魚淵と考へる場合。大子との繋がりは、医学。魚淵は高位の漢方医、大子の郷医の会読の講師として呼ばれたことがあつたかもしれない。また、大子は漢方薬附子が採れたところで、薬品に関する取引があつたのかもしれない。信濃と常陸、遠いようで実は近いのではないかと思う。
郷校を調べてゐるうち、医者の繋がりで、小川稽医館を創設した本間玄琢という人物に注目した。本間家の始祖道悦は、江戸で開業医をし、芭蕉の病気を治したことから親しく付き合ふようになつた。その後潮来に移り住む。俳名を松江、れつきとした芭蕉の門人であり、『鹿島詣』の最後に名と句を残す。
そのために家には芭蕉の真筆がたくさん残つていて。大子の真筆見たさに文化十四年（一八一七）小林一茶が、小川に移り住んでいた本間家を訪ねる。本間玄琢は、『鹿島詣』を世に広めるために、文化十年水戸で印刷し頒布している。また芭蕉資料の散逸をおそれて、墓所に芭蕉真筆で句碑を建立している。その由来を記したのが、医学の師である原南陽である。南陽は水戸藩の藩医で弟子をたくさん育てた。南陽が江戸に住まつていた頃、魚淵も医学の勉強にきていたのではないか。ただしこれも『南陽門人帳』には、魚淵の名前は残っていない。一茶は、玄琢とも面識があり、自分のパトロンでもあつた成美の死（文化十年）を江戸から信濃の魚淵に知らせている。
文政八年（一八一八）、玄琢（七十歳）を亡くした魚淵は、大子の郷医の会読の講師を務めた際、あるいは親交のあつた益子家に頼んで句碑を建立したのではないか。同じ医師道を志、俳諧に遊び切磋琢磨した友への思いを「川上とこの川下と月の友」に込めたのかもしれない。

（日立市居住）

修驗勢力から見た依上保

藤井 達也

仰出處也、仍執達如件、

文明十八

十月廿六日

慶儀（花押）

慶乘（花押）

白川

八槻別當御房

八溝山は靈場として名が知られており、その信仰が少なくとも鎌倉時代にまで遡ることが八槻都々古別神社藏の木造十一面観音坐像の銘文から見てとれる。また、中世の依上保は南郷地域の山伏を統括する八槻別当の強い影響下にあつたことが指摘されている。このように修驗との結びつきの強い依上保に関与した修驗勢力と在地勢力の実態を室町期に発生した山伏殺害事件から考えていく。

事件を見ていくにあたり、その概要を示した文書を紹介する。なお文書の写真版については本文末尾に掲載する。（『棚倉町史』より掲載）

乗々院御教書（折紙）（『八槻文書』所収）

於奥州依上保内、

為深谷方沙汰、大嶋

別當同行刑印（通）山臥（通）

文明十八年（一四八六）に奥州依上保内において、深谷氏により大嶋別当の同行刑部山伏が殺害された。この知らせを受けた京の熊野三山検校乗々院は、当道の大法の通りに事件を糺明するよう御教書を八槻別当に送っている。事件の被害者である修驗勢力と加害者である在地勢力の両方の視点からこの事件に迫っていく。

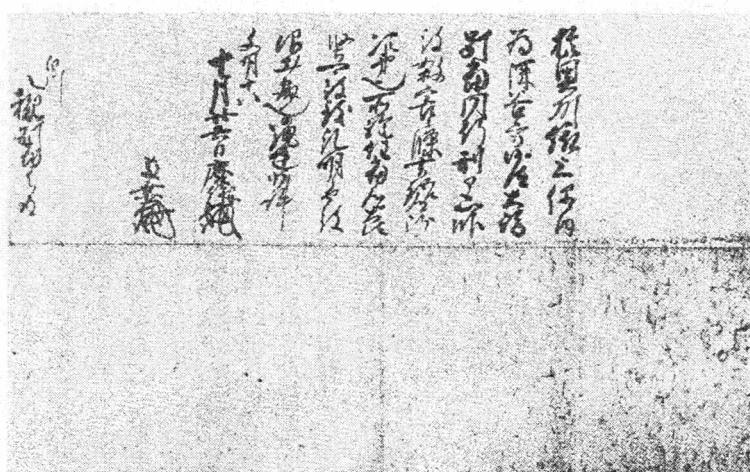
同行山伏を殺された大嶋別当は陸奥国菊田郡（現在の福島県いわき市）に基盤を持つており、「代々八槻之別當之依為御弟子」と『八槻文書』に出てくるように八槻別当とは師弟関係にあつた。この事件に対し実際にどのような検断が行われたのかは不明だが、この点を推測させる事例を二つ挙げておく。延徳元年（一四八九）に奥州磐城で八槻別当の荷物が檀那被官によつて強奪された際、事件の糾明と解決が乗々院から磐城郡の諸先達堅可被致糾明之由、被

に命じられている。また、永正十三年（一五一六）に小峯朝脩によつて八楓別当良賢が捕らえられ、その弟來福寺と同行少貳山伏が殺害された事件では、乘々院より「近國諸山伏」と「当國山伏中」に良賢の奪還が命じられている。以上の例から八楓別当の検断のあり方を推定すると、事件が発生した際に乗々院から八楓別当やその影響下にある山伏へと御教書が出され、山伏等が検断に携わるという検断システムが浮かび上がる。この背景には、菊田郡の山伏が依上保内の八溝山麓に来るといつた活動の広範囲性があると考えられ、広い地域にわたる山伏達とのネットワークを背景に八楓別当は南郷地域に検断権を及ぼしたものであろう。おそらく、文明十八年の依上保での事件の場合も同様なシステムによって解決がなされたものと思われる。

では次に、山伏殺害に加担したとされる深谷氏の存在形態を考えてみる。深谷氏は先程の御教書以外では名が見られないため実像を把握するのは困難ではあるが、十九世紀に編纂された『新編常陸國誌』、秋田藩編纂の系図より活動の一端を浮かび上がらせることができ。『新編常陸國誌』の「町付城」の項には、「依上保地頭深谷氏ノ遺地ナリ、文明中已ニ此地ニ居ル、永正中、佐竹氏依上ヲ掠領スルニ及ビ、深谷氏其管下ニ属ス」とあり、山伏殺害事件が起きた文明頃には町付城にいたと推定できたと記されていることから裏付けられる。深谷氏が居住したとされる町付城は八溝川と中郷川の合流地点北西の台地上にあり、八溝山への参詣路と中郷を通つて棚倉へとつながる道が分岐する地点に存在している。また、町付城の西側には少なくとも近世以前にまで遡ることのできる町付の近津神社が存在し、八楓都々古別神社の信仰圏に入つているとも想定できる。以上のこ

とから、中世後期に深谷氏は八溝山麓に居住して八楓修験とも何らかの関わりがあったと考えることができるのではないか。おそらく八溝山への入峰をめぐるトラブルから山伏殺害へとつながつたのではないだろうか。

以上雑駁な推論を重ねてしまつたが、中世依上保を考える上で貴重な情報を提示してくれる事件である。（水戸市在住）

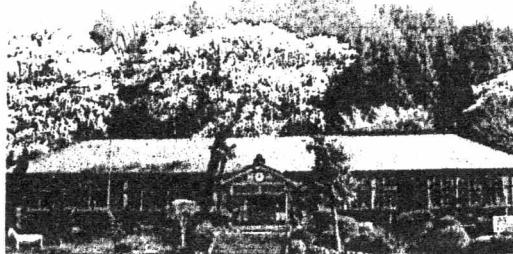


28.3×46.7

朝ドラ「おひさま」と上岡小学校

上岡小学校跡地保存の会

事務局長 菊池輝雄



旧大子町立上岡小学校

校門を入ると、正面に三棟の木造校舎が目に飛び込んでくる。三棟の木造校舎は、それぞれ長い年月を経て腰板にその歴史が刻まれ、年月の違いが出ており、概観が写真スポットとして人気の一つになっている。玄関の板戸を開けて中に入ると最初に現れるのが壁一面に張り出されている大正三年から平成十三年度・閉校までの卒業記念写真が一年のもれもなく、各学年の児童の姿が映し出されて来校者総てが感心し、自分自身の卒業当時を思い出し、重ね合わせて回想にふけっている姿がみられる。更に廊下を進み教室に入ると、木わくの窓から柔らかい日差しが木の床や木製の机、椅子に注ぎ、静寂な時間をかもし出しながらタイムスリップした感覚におちいった。

今にも児童達が元気に授業を受けている光景が浮かんでくる。また、長い間多くの人に磨かれた床板の光などを見ると、改めて木造建物の良さを認識させられた。

このような貴重な木造校舎をNHK朝ドラの撮影場所として選ばれた背景には、全国に数多くの校舎があるが、上岡小のように手入れが行きとどいており、総てが木造で特に内部が木質で出来ている。学校は、数少ないことと、学校としての絵となるために、これまでも数多くの撮影の場所として使用されてきているからである。

今回、NHK朝ドラマとして「おひさま」が全国に放送されたのは、このドラマの内容と上岡小学校の雰囲気が一致したためで、撮影場所として大子町・上岡小が全国に知れ渡り、これにともなって多くの観光客が大子町を訪れたのである。このドラマ放送によって感じたことは、従来もかなり有名な映画、テレビ放送がありましたが、いずれも単発であつたため、今回のよう長期にわたり放映されたことが多くの方が訪れた要因であつたと思われる。

旧上岡小を見学に訪れた方は、北は北海道から南は沖縄石垣島にまで及び、高齢者、若者、家族連れまで幅広い年齢の方が訪れている。中には二回、三回と訪れている人もおり、これは、単にドラマ人気の影響のみでなく、昔懐かしい木造の魅力が多くの方を惹き付けているようである。

訪れた人たちは、「木造校舎が懐かしく子どもの頃がよみがえった」「同時代を生きてきたのでその撮影地を是非見たかった」「木の机、椅子を見て小学生の頃を思い出しながらくなつた」「落ち着きがあり癒やされる」など、多くの声を聞くことができた。また、全国から訪れているため、各地の状況、人々とのふれあいが出来た。同時に大子町をPR出来たことが大きな成果でもあった。

訪れた人たちが帰り際に必ず言葉にすることは、「この校舎を長く保存して下さい」と、言う声であった。朝ドラの観光スポットとして注目された木造校舎は、明治以来地域の人たちが子弟の教育のために育んできた学舎である。ドラマの一時的なブームで終わりにしない為にも、この貴重な木造校舎を守り、付加価値のある施設にしていくことを訪れた人たちも望んでおり、再度来校するもどであると思うので、地域の皆さんをはじめ町民一人一人の協力と理解を得ながら保存に努力をしていきたい。

雑感「ふるさと歴史講座」を受講して

益子忠久

平成二十三年度の「ふるさと歴史講座」は、昨年の七月二十日（土）の第一回「旧大子町の経済更生運動と満州移民」講師小澤圓彦先生を皮切りに、八月二十七日（土）第二回「佐竹氏の秋田国替え」講師野内正美先生、十月十五日（土）第三回「義公、烈公ゆかりの地を訪ねて」と銘打つて、小澤、野内石井、斎藤の四先生を講師に、日立方面的現地を訪ねて回り、十一月十九日（土）の第四回は「江戸時代の暮らし」講師石井喜志夫先生、そして本年一月二十一日（土）第五回「先人達のまちづくりに学ぶ」講師斎藤典生先生を最後に終了した。各回それぞれに各講師の特色ある講義資料と講義内容に引き込まれて、充実感を覚える時間を過ごさせて頂いた。

何よりの感銘は講師の先生方のこの講座への打込み方である。「温故知新」をまさに地で行く、講義時の熱心で意欲的なその様子には、毎回、時間の経過を忘れさせるものがあり、改めて各先生に敬意を覚える。そしてこの先生方の熱意に共通するのは、この大子の現状を何とかしたい、大子が好きで好きで堪えられないという沸沸たる郷土愛と強い願である。

五十数年前の高校卒業当時の自分にはこれが欠けていた。というよりも、今顧みれば多感な年頃に抱いた理想とあまりにも違ひすぎると見えた現実に絶望と焦燥を覚え、新天地に夢を求めて我が家を後にしたこと記憶している。それから四十年近い「勤め人人生」を送った。ピリオドを打つて両親の待つ大子に戻った時、これから的时间はいずれ直面することになる親の老後の世話と、当時直感した旧態依然とした町の有様の打破に自分なりに何とか力を尽くしたい、そのことに時間を使いたいと考えた。その後、二十年近い歳月が流れ、両親を見取り、

自分自身が老境に入つて来たことを自覚せざるを得ない。昨今となってきた。最早残された時間は少ない。そういう願いで聞く先生方の熱くも深い内容のこもつた講義に、自分の思いを重ね合わせて文字通り刻を忘れ、忘我の境地で耳を傾け、そして、郷土を思うその心に共鳴しているのである。

自分のこの二十年近い時間の前半は、高齢者、障害者の介護の現場に身を置いてきた。そして後半は別の視点からより広い意味での福祉の仕事にかかわってきた。自分なりに努力し、それがなりの役に立つてきたと自負している。いや、そうして自分を慰めてきた。今一つ充足感、達成感に欠けるものがある。

性來、自分は聞いたり見たりすることを好み、感心のある事柄についてはずいぶん議論もする人一倍の理屈屋である。しかし、理屈よりも何よりも何事にもよらず真摯な有様に触れるその直感を大切にしてしまう。これは不可思議というか、動物的直感というか、十中八・九中は外れない感覺である。人の好き嫌いはない方であると自分では考えているが、しばらくつき合うとその人の本性を嗅ぎ当て妥協が出来ない。人付き合いの下手な所以である。老境に入つて人付き合いは変わってきた。先の短いことを考えないわけにはいかない必然的に約束じみたことに臆病になる。したがつて淡泊というか浅いものを感じる。

こうした中で先生方とは、自分自身の中で勝手に安心して付合つてている。付合つてているといつては失礼にすぎるがそれがぴつたりする。資料を操つていると、受講時の自分の想いが講義の内容とダブつて熱く脳裡に浮かんで來るのである。至福の一瞬であり、老いてなお若き日の想いに浸つてゐる自分を、老いた自分がなんとなく温かく見守つてゐる感覚である。今更じたばたしても始まらない。今といふこの一刻一刻をじつくりと味わいたい。これが現今の自分の姿である。

月居峠の月居山光明寺観音堂

月居山は北嶺と南嶺からなる標高約四〇三メートルの山である。その鞍部（峠）のやや平らな所に月居山光明寺屋敷跡がある。中腹にある案内板は、宗派は天台宗で大同二年（八〇七）創建と伝えている。加藤寛斎著『常陸国北郡里程間数之記』の絵図の中に、江戸時代末期頃の月居山光明寺観音堂とその周辺が描かれている。

絵図によると、その当時の月居山光明寺屋敷は、周りが杉で囲まれ、屋敷の前を街道が走り、街道に面して参拝に出入りする山門や階段が見られる。山門の奥に本堂があり、その左奥に観音堂、その前方に六地蔵堂が一基ある。この絵図上では庫裡は、見られず無住職の寺であつたことがわかる。現在月居山観音堂は、月居山中腹、斎昭公の歌碑近くに建立されている。月居城主野内大膳の守護本尊とも伝えられている。

元治元年（一八六四）十月月居峠における天狗党と諸生党の戦いで本堂、観音堂は戦禍をあびて焼失したが、本尊は運び出されて龍泰院に安置された。昭和十一年（一九三六）竹内勇之助が袋田温泉ホテルの営業を開始したのを機会に、天狗・諸生の戦いで焼失した観音堂の再興を企画し、昭和十七年に再建された。（聖観音菩薩像）は、再び観音堂に安置された。檀家は一軒もなく、信者はいないが、月居山を訪れる人の



月居峠『北郡里程間数之記』

塔や木造、青銅の仏像、供養塔などが奉安されている。

その後、月居山光明寺の山門、土壇、観音堂の床、廻廊などが傷み、危険度を増してきたため、本尊はしばらくの間、袋田温泉ホテル内（現ロマン館）で保護してきた。しかし、大子町は観光立町ということから、月居観音周辺整備事業の必要がたかまり、町や県の後押しもあって、平成十年二月袋田地区の有志が中心となり、月居山観音堂整備委員会を設置し、関係者に呼びかけて淨財を集め、観音堂をはじめ山門、土壇、鐘楼などの整備事業を実施した。

- ・平成十一年七月観音堂改修工事着手。工期は十月末日
- ・平成十二年六月鐘樓新築工事着手。十月末日完成

- ・平成十三年三月山門新築工事、塀壁工事完了

整備事業は、三年四か月の歳月を費やして、月居山光明寺観音堂整備事業は完了した。鐘樓は、月居峠道の曲がり角に建てられていて、山門の突き当たりの境内に移された。平成十三年六月二十三日、落慶法要式が月居峠の月居山光明寺跡の境内で行われ、袋田温泉ホテル内の仮堂宇で保護されていた聖観音菩薩などは、新しい朱塗りの観音堂に再び安置された。（小澤）



月居山光明寺観音堂と聖観音

昭和の初め頃の農家の行事 四 三月の行事

一、ひな祭り（三月三日）女の子のお祝いだ。納戸の長持の中から古びたひな人形を取り出して飾る。昔のおひな様には胴体は藁でその上に着物を着せてあり、首は竹の串に付いて、藁の胸に刺して固定する。こんな人形も有つた。甘酒や草餅などを供えるくらいだが結構楽しみだつた。

二、地蔵講（三月二十三日、八月二十三日）大抵の村には道端に地蔵様が立つていて、赤いよだれ掛けや頭巾を着けている。地蔵は安産や子供の無事な成長を見守つてくれる有り難い仏様で、縁日にはお祭りをする。



女の人が集まつて灯明を上げ

て拝む。このろうそくを頂いてきてお産の時に上げると、お産が軽くなると言われている。だからお産が予定されている家ではろうそくを貰つていく。後は淡島講と同じで女人達の楽しみの場になる。

昭和の初め頃の農家の行事 五 四、五、六月の行事

一、お釈迦様（四月八日）餅をついて神棚に上げる。昔は栃木県雲巖寺のお祭りで、多くの人がお参りに行つた。その頃は歩いて行つたので一日がかりだつた。

二、御節句（五月五日）鯉のぼりを上げて祝う男の子のお祝いだ。昔の鯉のぼりは紙で出来ていて、風が吹くとガサガサと音がしたり、強い風や雨にあたると切れてしまう事が

あつた。だから天気の悪い日には上げられないし、雨でも降つて来そうになると慌てて降ろさなければならなかつた。

鯉のぼりやひな人形は、そのお嫁さんの実家の親が贈る事になつてゐるので、娘が恥ずかしい思いをしないようとに競つて大きい鯉のぼりを買つてきた。

御節句の楽しみは柏餅だ。本当は柏の葉で包むのだが、この辺では朴の木の葉で包む。この方が葉も大きいし蒸かした時の香りもずっとといい。

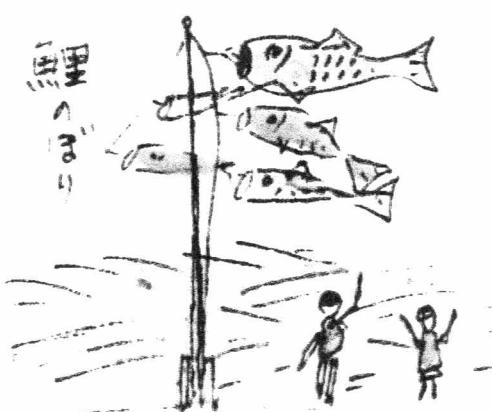
鯉のぼりの歌も多い。「斐の波と雲の波・・・」とか「屋根より高い鯉のぼり・・・」や「柱の傷はおとしの・・・」などだが、そのちまきというのはどんな物か分からなかつた。

御節句のご馳走と言えば厚い皮にたっぷり餡の入つた香ばしい柏餅だけだつた。

三、むげつづいたち（六月一日）この日は収穫した新しい小麦で、粉をひきうどんを打つて食べると言う習慣があつた。旧暦のこの頃になるともう小麦が出来るようになる。

今七月頃だが、旧暦は年によつては早いこともあるので、早稲の白莢などという品種を作つて早く食べられるようにしてゐた。

（石井）



肥後和男氏寄贈資料について (二)

前号で生瀬出身の歴史学者(元東京教育大学名誉教授)肥後和男について紹介したが、今回は、その著作について紹介しよう。

肥後氏について、中山信名の「常陸編年」には、「文禄四年(一五九四)八月十八日 初原ノ内鍬柄ノ内五十石ヲ肥後刑部少輔ニ与フ コレハ下野の塩谷義綱力浪人也 肥後氏文書」とあり、肥後和男「生瀬乱のこと」(「茨城県史研究」第2号)

には、庄屋大藤氏の縁者として、生瀬に土着したという。

肥後和男は故郷の父母や歴史に愛着の念を持つて記している。昭和三十三年から昭和三十八年まで、肥後が数え年六十歳から六五歳にかけて詠んだ句集「玉石集」を次に紹介しよう。

昭和三十三年

新井白石はすぐれた歴史家であつただけに新井家系というものを書いて自分の家の出自を研究し、新田氏の支族であることを考証した。

私も歴史家の一人だから、これに倣つて肥後家系といつたものを研究すべきであるが、少々怠慢でやつていない。何しろ茨城県久慈郡大子町大字小生瀬に代々住んだ百姓の子だからその家系といつても よく分からぬのが当然なのだ。

昭和三十四年の正月

天地の光かがよひ 神々も 幸はふ国と祖祖の言ひつき
来る日の本の道のはてなる山村にうまれしわれは
いとけなく つたなき身をもかへりみず
文の学びにいたつきて ここに六十路の坂こへぬ
しかはあれども 若き日に 立てたる誓ひ なほ いまだ

果しおへねば ますらをの ををしき心 ふりおこし
いよゝ はげまむ 生きのかぎりを

昭和三十五年一月

大分前に父母の石碑を立てた。八溝石を使つたがその側面があいていたのでそれに歌をかいた。

ゆゝしくも 雄々しかりけるますらをの

奥つきどころ とはに安かれ

ありし日の面影のみぞ しのばれて

しるしの石になみだ そそぐも

大沢をへて帰る

ふるさとの 秋の日和を うすぐらき

座敷につどい 茶をのみにけり

黄ばみそめし山路をゆけば 秋の田を

茹りほす人ら かへりみもせず

古道を覆ふ 秋草かきわけし 行く山里の 空の高さよ

昭和三十六年一月三十一日 水戸常盤神社 梅花祭に奉る

神垣に匂ふ白梅とこしへに

めでたき國のしるしなりけり

六十あまり三という年迎えけり 父の寿命に一年を加う

昭和三十七年一月九日

霜凍る山家なれどもふるさとの
空なつかしみ とまり重ぬる

昭和三十七年二月三日

冬寒み こたつにありて古の

文に心をうつすこのごろ

節分は今宵なりけり幼き日

豆まけること思い出しぬ

神棚に供えし豆を 長男の

われはまきけり いきばりて

父母も若くいませり わがちさき

年男とて豆まける日は

雪降りし日もありつらむ ふるさとの

山里こめて豆を撒きたる

年豆といひて食いけり節分の

まきける豆をひろいかてらに

鍾鬼の絵 かくべきものをわが家には

それが無しとて口惜しかりけり

豆がらに觸の頭さしたるを

戸口に立つるもわが役なりし

本宅には紺屋のなにがしかが描いたという鍾鬼の絵があり

節分には必ずかけた。それが羨しくて、うちにもあんなのがあ

つたらと思ひ出したこと、今更のごとく思ひ出す、

昔ながらの行事を守つていた伯父も伯母も今は無い、父も母

も世を去つた、自分が昔、室々に豆をまいたことも遠い遠い夢

のようない出だ、人生の短かさ、はかなさ、これは誰もどう

することもできないことだ。

私も今年は六十四だ。あと何年生きるものでもない、これをいかに生きるかが大問題である。結局は年来心がけている研究を一步でも二歩でも進める外はあるまい。今年は体育史の成稿を期し、明年停年後は、古事記の註釈的研究を出して行きたい。限りある命の中に限りなき

仕事ありけり 惫るな ゆめ

昭和三十八年の年賀状

ふじの嶺に 旭かがやき四方の海

しづかに明るく 今朝の春かな

新むの年の始に神かけて 時風立たぬ世を祈るかな
昭和三十八年七月 隆来る

しばし見ざる間に孫は背のびて、大きな声で、じいちゃん

よふ。いつしかわれも三人の孫をもつおじいさんとはなりはて

にけり。ちさき孫と別るゝ時も遠からじ。

人の世こそは はかなきものよ 行末は いかなる世にも

あらはされ、雄々しく強く生きよわが孫 はたらけばはたらき

がいはあるものぞ ちさき時より怠るべからず

ターチヤン、ター坊、タツクンチヤン、ペットネームも愛ら

しきかな。

昭和三十八年八月十五日 岩村城

古城わたる 夏の朝風身にしみて 昔語りもなつかしきかな

昭和三十八年九月一日 三美亭(大子)

久慈川のきよき流れよ とこしへに

今日の集ひを人に伝えよ

夏の日の うさはらさむと集いたる

ふるき友垣の ななかき重いよ

昭和三十八年九月三日 若竹(大子)

五十年 へだてて ここに集れる

古同窓よ いつまた相見ん

私は明治三十二年(一八九九)四月八日朝、茨城県久慈郡佐原村大字楨野地字久保の金子直三郎の隠居所で生まれた。つまり、母の実家である。祖母ひさは黒沢村上郷の丹治家の出である。丹治家は八溝山の修験下之坊であった。私の父は肥後巳之介、これは明治二年七月二十日生れ、昭和五年七月二十日に没した。母は昭和二十年八月十七日に亡くなつた。

付記 昭和二十九年九月に公職追放を受けたと記しましたが、昭和二十一年九月と訂正します。(野内)

歴史資料の整理について

大子町教育委員会では、町史編さん事業等により収集した歴史資料（歴史刊行物、所蔵資料、所蔵文化財、収集写真、聞き取り調査カセットテープ）を多く所蔵している。しかし、それらの多くは未整理の状態であり、所蔵数も把握できていない。この度、大子町立中央公民館の歴史資料室等にある歴史資料を整理し、データベース化（目録作成）及び一部デジタル化することになりました。

①歴史資料の集約

現在、五施設に分散して所蔵している歴史資料を二施設に集約する。中央公民館、文武館文庫、宮川自然休養村センター、袋田コミュニティセンター→中央公民館歴史資料室・書庫に所蔵資料（歴史刊行物、古文書、公文書）、宮川自然休養村センター展示室に所蔵文化財（土器、化石、古民具）

②書架のレイアウト

書架レイアウトの構築、書架・棚番号の付番

③歴史刊行物の整理及びデータベース化

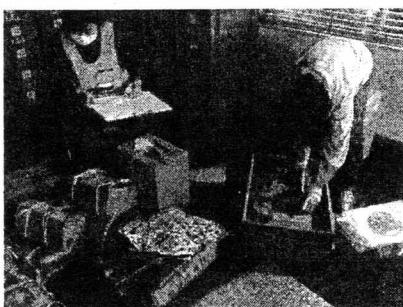
整理、再配架、資料番号の付番、

④所蔵資料（古文書、公文書）の整理及びデータベース化

整理、配架、保存箱新調（ビ

⑤所蔵文化財（土器、化石、古民具）の整理及びデータベース化

土器・化石・テンバコに整理（ビニル袋でまとめる）、再配置、テ



作業の様子（宮川：化石整理）

ンバコ新調、テンバコに付番、データベース作成
古民具・再配置、ドライクリーニング、整理番号付番、データベース作成

⑥収集写真（ネガ）の整理及びデータベース化

ネガファイルに収納、再配架、ネガファイル新調、整理番号付番、コマ数のカウント、データベース作成

⑦聞き取りカセットテープの整理及びデータベース化

収納ケースに整理、再配架、収納ケース新調、整理番号付番

⑧歴代町村長の肖像画撮影、整理及びデータベース化

デジタル撮影・旧大子町（十人）、旧依上村（十人）、旧佐原村（十三人）、旧黒沢村（八人）、旧宮川村（十三人）、旧生瀬村（十二人）、旧袋田村（十七人）、旧上小川村（八人）、旧下小川村（十人）、資料番号付番、データベース作成
このことにより、検索や資料閲覧等の業務の迅速化を図る一方、町民の方への歴史資料の情報提供や公開を行うことを目的としている。業務終了後、改めて歴史資料の現況を報告したい。（皆川）

編集人 斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（元 教員）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圭彦（元 教員）

皆川 敦史（大子町教育委員会）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付

久慈郡大子町池田二六六九番地